

いぶされてこそ人も一人前 哲学者ベーコンの自己反省

「武士は食わねど高楊枝、なんて諺まであるせいとか、わが国では、みだりに食べものごとを口にするのは、はしたないこととされてきた。まして、それを人の名前にするとは！である。

が、ところ変われば何とやら。欧米では「フランス・シヤム」だの「フランス・ベーコン」だのと、日本人の感覚ではとても平然としてはいられないようなネーミングが少なくない。もともと「フランス・シヤム」の方は「Jam」ではなくて「James」だから「シヤム」の空似だが、「フランス・ベーコン」の方は、姓も食べ物の方も同じ「Bacon」。十六世紀後半の偉大な哲学者に向かって「Mr. Bacon!」などと呼びかけるとき、呼びかける方も呼びかけられる方もはたしてどんな気分になったものか？

ご存じのように、ベーコンは、一五六一年から一六二六年まで英国で活躍した「経験論」の哲学者。

一六一二年に汚職のかどで訴追されるまでは、大物政治家として、下院議員、検事総長、大法官と出世街道を上りつめたが、汚職が発覚、罰金禁固刑に処せられるや、政界を退き、一転して研究、著作に専念。観察と実験に基づく近代科学の方法論を確立した。

こうした経歴をわきまえた上で次のエピソードにふれると、この大法官の姓が、こともあろうにベーコンで、彼がそれについて少なからぬこだわりを持っていたことがありありなのである。

ある日、大法官フランス・ベーコンの前に一人の罪人が引き出された。

罪人は、大法官に深々と一礼した後、自分があたかも一世一代の大舞台に立っているかのような、思い入れたっぷりの口調でこう言った。

「大法官殿、わたしの名はホッグです。ホッグ(豚肉)はベーコンさまと同類です。どうか、お助けのほどを」すると、大法官は

「いや、ほんもののベーコンになるには、ぶら下げられ、たっぷりいぶされなくてはならないのだ」と。(事実、汚職がばれて自分もそうなったのだった。)

ワンポイント・知識

食肉加工品(ハム・ソーセージ・ベーコンなど)の保存法

食肉加工品は、空気や光に触れると退色や変質・乾燥の原因になります。そのため、開封後はラップでしっかりと包み、できるだけ空気に触れないようにし、商品のパッケージに記載されている保存方法で正しい保存して下さい。

また、一度開封すると保存性は著しく低下するので、なるべく早く食べましょう。